

葛西善藏の少年時代

——葛西善藏伝(三)——

小山内 時雄

小稿は、葛西善藏伝の第一章 幼少年時代の後半の部分、すなわち善藏の生い立とその少年時代を述べるのが目的である。生い立ちについては「父方の系譜」(弘前大学人文社会科学会機関誌「人文社会」第十六号国語国文学篇Ⅱ)および「母方の系譜」(弘前大学教育学部紀要第四号)の稿でふれて来たので省略するが、叙述の都合上簡単に事項だけをあげておくこととする。

葛西善藏は明治二十年(一八八七)一月十六日、青森県中津軽郡弘前町(現在、市)松森町百四十一番地に、父字一郎(三十歳)母ひさ(二十六歳)の長男として生れた。長女いそ(十歳)次女ちよ(六歳・北海道に現在健在)の二姉があり、このほか曾祖母たけ、祖母かよを加えた七人家族であった。

彼が三歳になった明治二十二年の早春、家産傾いて一家を挙げて北海道に移住した。「姉を訪ねて」(大正十年七月「人間」)によれば、後志国寿都郡に移ったことになっている。その後、島牧郡本目村二十番地に転住した。その間、二十二年に弟勇藏が生れ、翌二十三年には曾祖母たけが亡くなっている。

北海道においても結局家運を挽回できず、一家は再度津軽海峡を南へ渡り、ひとまず落ちついた所が青森町（現在・市）大字荻町三十番戸 秋本宇吉方であった。明治二十四年八月のことである。善蔵は五歳になっていた。北海道でもそうであるが、青森で父は何をもって生計を立てゝいたかはわからない。

善蔵が七歳になった明治二十六年一月、こんどは北津軽郡五所川原村（現在・市）二百三十三番戸に転籍した。（青森町役場明治三十六年除籍簿による。五所川原村役場同年の除籍簿には三百三十番戸借家とある）父は呉服反物を荷って付近の部落を行商して生活を立てたという。こゝからまた／＼南郡碓ヶ関村碓ヶ関四十八番地に転籍し、そこでも駅前の山神堂八十八番地一号に居を移している。明治三十年、善蔵十一歳の時である。奥羽線碓ヶ関駅が開駅となり、父が鉄道運送業をはじめ、丸本支店を経営することになったからである。

かく、小学校を了えるまでも居所が変ること六度に及んでいる。後年彼の意志によった場合を加えると挙ぐるに暇ない程で、葛西の短かい一生は、一と口にいふと、一所不住の生涯であった。「旅から旅へ」の一生であったという宇野浩二の言は正に云いえている。

一月生れである善蔵は、明治二十六年四月、五所川原尋常小学校に入学したのではないかと考えられる。従来 of 年譜では同二十七年本籍を五所川原から碓ヶ関村に移し、四月入学となっている。しかし五所川原村三百三十番戸から南津軽郡碓ヶ関村四十八番戸に転籍したのは、明治二十六年五月三十一日であり、はじめ五所川原の小学校に入学して、二ヶ月ばかりして碓ヶ関の小学校に転校した、と考えた方が妥当のように思う。「小学校も五所川原にしばらく上りましたよ」という談話筆記（「少年の日」大正十五年十二月十三日「東奥日報」）や、葛西と同級生野呂三次郎が「自分は九歳で小学校に入ったが、葛西君ははっきりしないが入学式の時から一緒になく、すこしおくれで、ある

いは二年位の時かに入ってきたように思う」(昭和三十四年一月十六日聞書)と語るところとも合致するからである。当時、小学校は四年制であったので、修了したのは明治三十年三月、十一歳の時である。そして、同校にはまだ高等科が併置されてなかったので、補習科に入学した。補習科二年を卒業したのは明治三十二年三月である。

小学校時代の資料は前記野呂三次郎の回顧談以外ないので左に掲げておく。

学校は二階建てで、階下は職員室・小使室に教室が一つ、階上に三教室あり、一組は二十七人であった。学科は地理理科、歴史、読方、算術などであった。先生は校長の増田友衛という人と音楽の好きな佐々木直太郎先生(善蔵の母の弟)、それから石田政蔵先生の姉にあたる人にも習った。自分の兄は善八と云ったが、十三歳で入学、自分と同級したが、葛西とも同級であった。善八は一番であった。これは年が多いのだから当然であった。兄を除けば葛西は一番学業の出来がよかった。組では大きな方ではなかった。算盤などは不得手であったが、作文が上手であったという風に憶えている。ある日、朝早く行くと、また学校の玄関の戸が開いてなく、その前に腰を下して複習予習をしていた男の子があった。それが葛西であった。いつもこうだったかどうかはわからない。町(弘前のことをこう呼んだ)の子供だから、いつも服装はきちんとしていて行儀もよく、自分たち田舎育ちと違って山を走り廻ることは苦手とした。いまでいう体操などのスポーツは不得手だったのです。教室でもおとなしかったが、実際の腹はなか／＼勝気で、ジョッパリ(強情張り)などところのある人であった。意志の強い人であった。

自分の家は神社(大山祇神社)の傍の鉄道の線路の脇にあったが、葛西一家は川(白沢川)の傍に借家をしていた自分は葛西と二人でよくこの川でカジカ(鰯)をとって遊んだ。ある時、一匹のカジカを俺が見つけたんだ、いや俺ののだということから喧嘩になり、水のかけあいから、最後は川の中で取っ組み合いとなった。葛西の姉と思う人が針

仕事をしていたが、縁側から「喧嘩、どっちもわるいんでせえ」と云って止め、二人に落花糖をくれて仲直りさせてくれたこともあった。

自分は小学校だけで終ったが、当時上級学校に進むものは村に四五人はいた。よく出来た葛西が中学に行かなかったのは、経済的な関係と思った。

学校を出てから鉄道に入り碇ヶ関の駅員をしていた。そのうち姿が見えなくなったので聞いたら、松前に行ったという。俸給が内地よりよかったので北海道に出かけたのだと思う。自分は明治四十年に樺太（カバフトと発音した）に行き、昭和二十二年引き上げてきたが、葛西が小説を書いているという話を、村から来る若い者から聞いて知っていた。自分の葛西についての記憶はそんなものだが、最後に小学校時代の葛西の渾各は「ゼンクラ」と云っていた。善藏をそう読んだので。彼を怒らせる時には、こういう風にいったものである。

以上の談話は少年時代の善藏の姿がある程度伝えている。級中常に首位かその近くの成績で、算数は不得手だった。が文を綴ることには特に優れていたという点は、同じく同級生だった黒滝俊一（故人）も筆者に語ってくれたところである。

野呂談話では、はじめ碇ヶ関駅員となり給料がよいので北海道へ渡ったという新事実が述べられている点が目される。その真偽はともかく、もしそうだとすると、それは明治三十五年七月以降、冬までの期間のことになる。母が病没したのは同年七月十一日で、彼は母の病篤くなったので東京から帰っている。そして冬には友人と北海道に渡って岩見沢で鉄道従業員となっているからである。僅か半年にも満たない期間だったことになるが、父が鉄道運送業をやっていた関係から伝手を求めて駅員になったものと考えられなくはない。他にこれという仕事のない碇ヶ関で働く

となれば駅の臨時雇ぐらいにはなつたかも知れないが、しかし、善蔵の近親者でこの事実を語る者のないところから見れば、あるいは野呂氏の記憶ちがいであるかも知れない。とにかくいまは疑問のまゝにしておく。

補修科二年の十一月二十三日 雇教員石田政蔵が碇ヶ関小学校に赴任してきた。翌年三月卒業した善蔵は、この先生の膝下にあつた期間というのは短いのであるが、卒業後も長く師事し、絶えず温情あふれる鞭達と激励を受けた。「先生は二十年前から村に居るのである。そして全く子供等と読書と酒を相手に、禅僧のやうな独身生活が続けて来て、村の人達からも尋常で無い尊敬を受けてゐる先生である。彼もまたその弟子の一人であつた」(「火傷」―大正八年四月「文章世界」)とか、「酔狸州七席七題」(大正十三年六月「中央公論」)の第五話「一路平安」の終りにも「私は幸ひに小学校時分に、僕の育つた村の先生――石川(田)政蔵先生に篤き、厳しき薫陶を受けました」と書いてゐる如く、この先生の感化影響は見逃すことはできない。それは肉体を鍛錬することによつて、そこに健全なる精神が宿ることを狙うという一種の精神主義である。石田政蔵は碇ヶ関赴任後の明治三十三年九月、青少年を集めて早起会(碇ヶ関養生会)を創めた。弘前には既に同じ目的の伊東重の東門会があり、石田のはこれに倣つたものである。明治三十九年八月、二十歳の善蔵は東京から碇ヶ関まで徒歩で帰郷したが、これなどもその一つのあらわれと見ることができるであらう。また同じ頃、石田先生とそのグループ一行十名で暗門滝探勝をしているが、善蔵もこれに参加、非常に無理な長里程踏破をやつてゐる。これなども単に名勝に遊ぶというだけでなく、困難に直面して挫折しない気力、苦境突破の気魄養成をめざす石田先生の教育であつたので、不屈の魂は、善蔵生来のものとしても、この石田先生に接している間に、更に強く育てられたものと考へられる。先生はその弟子の行きづまつた時、困つた時、寡言のうちによく勇気づけ、励したのである。「火傷」に「走つて行つて泣言の並べられるやうな友達のゐない」彼が、学校に先生を訪ひて泣言をならべるところが書かれてゐる。

「あゝ僕も駄目だ！斯んな窮境に落ち込んで了ったのでは、ほんとに仕方が無い。どちらを向いてもこの無感興無感激の現実の壁だ。どうかして突破したい、飛び超えたいとは思ふが、それが出来ない、口惜しくて仕方が無いがどうも飛べない」彼は斯う先生に訴へる調子で云ふ。

「いや、飛べんだっていゝよ。胡麻化しさへしなればいゝよ」と先生は云ふ。

「余りに貧乏だ……」と彼また云ふ。

「なあに大したこぢやないよ」と先生は云ふ。

石田政蔵のことは「埋葬そのほか」（大正十年七月「改造」）にも描かれているが、少年時代から善蔵に感化を与えた人として忘れることのできない人物である。つる未亡人によれば、彼は生前しばらく「俺を文士に仕込んだのは最初は石田さんだ」と云っていたという。その石田政蔵は善蔵のことを「小学校時代の交渉は短時日で、彼はさまで文学的素質ありとも見えず、いずれかと云えば理屈っぽい、しかしどこことなくしつかりした意地の強い少年であつたが、他日文学をもつて立とうとは思わなかつた」「記憶にあるのは彼の生前しばらく会飲せし事にて、酔うて来ると意気昂り蒼白の顔をして臂を張り眉を揚げて高談する様、目に見ゆるようである」「小生は別に深い素養も何もないのだが、彼などは余程深いように買ひ被っていたようだ」と語っている。（板東三百聞書）

さて、明治三十二年、小学校を出た善蔵は五所川原の親戚の質屋でしばらく手伝いをした。少年時代の善蔵を知るによい談話筆記なので、「少年の日」を右に掲げておく。

僕は弘前に生まれましたが——少年の日の思ひ出となると五所川原の話がしたいね。小学校も五所川原にしばらく上りましたよ。一昨年冬に、恰度亡父の法要で浪岡へ帰ったついでに五所川原へも行ったが、随分変わつてゐますね。僕の親父の姉は五所川原の神家へ嫁いて居たものですから、その関係で僕は少年時代五所川原に住むことにな

ったものですが、今青森で病院を開いてゐる神博士はその父の姉の子といふわけです。僕は少年時代竹之助さんには可愛がられてよく、田圃へ魚や虫をとりて連れられて出掛けたものです。竹之助さんは仲々利かない少年でしたので、僕はその子分格で大いに肩を広くして歩いたのですねはゝ（と淋しい様な笑ひ）僕の仲よしに平井町に平もの、おんぢ、と云ふのがあってよく相撲をとったりして遊んだものさ。僕が大きくなって文学をやるやうになつて素因は矢張り五所川原の少年時代の生活当時に作られたものと言へますね、それは神さんの先代も御承知の通り御医者さんでありまして、竹之助さんの親さんといふ人はそれは／＼立派な人で維新の当時、長崎まで医学を修めに行つた位の人でしたが、子供は竹之助さんと、その姉さんのたか、さんといふ二人きりでしたのでたか、さんに婿を迎へて、その婿の重三郎さんに質屋の方をやらせてました。只今は分家してたか、さんの息の伊三郎さんが紙屋を始め、質屋も矢張りやりますよ——それで僕は小学校を出て間もなく、しばらく重三郎さんの手伝をして質屋の帳場に座つたことがあつたよ——一寸變つてゐるだらう。まったく——処が、重三郎さんは商用で旅行したりして留守になると、僕は早速蔵へ飛んで行つて、古い本を捜したものです。里見八犬伝なんか、ほこりをはたき／＼愛読おかなかつたね。夫ですつかり文芸ものに趣味をもつてしまつたんだ。つまり蔵の中の八犬伝が病付きで、碌でもない小説家になつたといふわけですよ。後略

神家は藩政の時代から、小学校が五所川原に設立されるまで私塾をひらいた家であり、親子二代にわたる医家でもあつた。このような家の雰囲気と、商家であつた善蔵の家のそれとは、おのずから相違したであらうことは容易に想像されるところである。それは、文学とはおよそ縁遠いものであつたかも知れないが、長からぬ神家での生活のうち、勉強しなければならぬものだということを、また読書のよろこびを深く心に刻みつけたのではないかと思う。「酔狸州七席七題」第二話「鏡」によれば、明治三十三年ないし三十四年すなわち十四五歳の時、青森へ丁稚奉公に行

ったことになっているが、「その時分は、没落した一家の再興といふ考への外に、少年の心持としてはありませんでした」と語る通り、商によって身を立てようとしたのであろうが、一年足らずの奉公で、家に帰っている。「自分の身体の弱いために、胃腸を損じ」たことを理由としているが、むしろ神家での生活の雰囲気の影響ではなかったかと思ふのである。

なほ全集年譜では、十四歳の明治三十三年に初めて出京、新聞売りの傍ら、夜学に通う、とある。これは、あるいは三十五年（十六歳）のことであるかも知れない。「霜枯れ作家の話」（大正十四年三月「世紀」）には、「僕が十六の年に一度東京に出てきたことがある。二つ三つ年上の友達と一緒にだったが、それから母の死ぬ前まで半年ばかり東京に居って、困ったと云っても、それによって生活も何も出来なかったけれども、新聞売子までしたことがあった」とあるのである。小説には、艶歌師の群れに投じたことをも書いてあるが、これは葛西一流の虚構と思はれる。音楽的素養のあった人とは思えないのである。

理想と活動を夢みたこの少年時代を、僕は今でも都会とか都会の人に対して、親しみを持たない田舎人だから、余程変窟で恥しがりやだったと思う、それでもやる（新聞売子などを）にはやっさに違ひないのだ、と回想している。こうした青雲の志に燃えての東京での生活も、七月十一日の母の死によって挫折せざるを得なかったのである。

母の死は流産が原因であったが、まだ四十五歳の父は、その年の内に後添をもらうことになり、南津軽郡田舎村垂柳 小野清作妹みよ（三十五歳）を迎え入れた。善蔵の弟勇蔵は十四歳になっていて、世話もかゝらなかったが、父は運この送店経営のために畑に手が廻りかねたがためである。この継母と善蔵との仲はとかく円満を欠いたらしく、年の冬か、翌年彼が北海道へ渡ったのも、継母との不和も原因をなしていたのではないかと思う。

善蔵が再度津軽海峡を北へ渡り、室蘭に行ったのは、全集年譜では、明治三十五年、十六歳の時の事とし、「姉を

訪ねて」(大正十年七月「人間」)では「十七の時で、その時は友達と二人だったが、冬で海の荒い時節だった」と、一年の違いがある。いずれとも決め手はないが、この時代、本州と室蘭を結ぶ定期航路は、日本郵船会社経営の三港定期航路(青森・函館・室蘭)であった。運航船は肥後丸・薩摩丸・陸奥丸の三船で、いずれも千噸級の汽船であった。おそらく善蔵は、このどれかの船で青森を出て函館に寄港し、室蘭に上陸したのであらう。同行したのは、同郷の岸三吉(故人)、泉某と三人であった。(岸三吉遺族―歌志内在住―談)

岸三吉は、明治十九年一月の生れ、善蔵より一歳の年長であった。

そして、室蘭の国の知人で駅に勤めて居る人の世話で、岩見沢で鉄道従業員として働くことになったのであらう。岸三吉もこの時同じく鉄道に勤めたが、明治四十年には、石狩国空知郡歌志内に寄留して、市街地鉄道官で平穩な生活に入つて、一子までもうけていた。しかし善蔵は腰が落ちつかずに職を離れてしまい、その後、営林署に勤めたり、あるいは砂金人夫になったり、鉄道の枕木採伐に従つたり二年にわたる暗澹たる放浪生活をしなければならなかった。この時の北海道での善蔵の足どりは不明で、わずかに当時を知る手がかりとなるのは、「雪をんな」(大正六年七月「処女文壇」)および「雪をんな」(二)として、大正十四年六月の「新潮」に発表され、全集には削除されて収録とならなかった、随筆のような短い続篇である。「雪をんな」は、新婚当時の回想と、この北海道放浪のことを織り合わせた幻想的な、抒情味豊かな作品で、大正三年一月に脱稿したものである。その中に、次のようにある。

私はこの島での都の安宿にくすぶってゐた。私はちつとして暖かい春を待つだけの貯へが無かった。またこの島から更に北の島へ渡るには、時期を失してゐた。で私は丁度、砂金掘人夫の収入の多いと云ふ話に釣られて行つて見たのだが、身を切らるゝやうな凍つた河水に堪へ兼ねて、都へと舞ひ戻つた処であつた。

が、折よく、私はその安宿で、山の親方に見出された。山と云ふのは鉄道の枕木採伐の山であつた。

幾度も／＼乗替へして、汽車は石炭の出る山の奥の町で行止った。そしてそこから更に六里程も山奥へ這入るのであった。

大きな苦小屋が三棟並んで建ってゐた。小屋の中を棟なりに一間幅の土間が通って、それか幾つかの囲炉裡を造ってゐた。両側から土間を挟んで枕を並べて寝るのであった。

右の中で、島の都と云っているのは歌志内のことである。この辺一帯は大炭田で、歌志内の開拓もまた石炭採掘によつて興った。明治二十年に試掘がはじめられ、善蔵が行った頃には、既に町の形態が整っていたのである。明治四十一年の人口は八千人で、当時未開の北海道にあつては、かなり隆盛であつた。歌志内に行つたのは、善蔵の母の妹はる（明治十年生れ）が、明治二十五年に同村の北川治助と結婚し、治助は同三十年十二月三日分家しこの歌志内村字南市街地三十五番地に転籍していたので、（碓ヶ関村役場大正十年除籍簿、この叔母夫婦を頼つたものと思われるこの義理の叔父北川治助が、鉄道の枕木採伐の事業をやっていたのである。砂金入夫のことは、「砂川の砂金入夫、つまり山の仕事も、行つてみると所謂監獄部屋だつた。私は深く深く北海道の労働が厭やになつた」（雪をんな）（二））によつて明瞭である。歌志内近くの砂川で、この労働に従事したのであつた。また、「私はその時分、対岸の一寸した道普請に働いていたのだつた。深い熊笹の藪を開いたりしての新道を造る、さう云つた労働に、私は朝の三時頃に起されて蒸氣の曳船の舳に乗つて、大ぜいの人達と仕事に出掛けたものだつた」（「同」（一））とあつて土工もしたことを知るのである。

要するに、善蔵はこのように職を転々とし、未開の北海道の中部、石狩川の上流空知川に沿うて、岩見沢、砂川、歌志内等の地方で放浪生活を送つたのである。そして、「冷たく、真白く、死のやうに沈黙した山の谷底から、夜更けの氷のやうに冴えた月を仰いで、」

「然うだ！帰るべき時だ、帰らねばならぬ時が来たのだ！」（「雪をんな」）
と自分に云い聞かせたのである。

この時、明治三十八年、善蔵は十九歳になっていた。

（第一章おわり）